

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鮎鮎粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしはしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合くと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあどてお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鮎鮎粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしはしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合くと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあどてお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鮎粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしませんがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水洩の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合くと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鮎粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしませんがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水洩の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合くと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鯛屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鯛鮓粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしはしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三次度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあどてお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鯛屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには鯛鮓粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしはしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三次度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあどてお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには餛飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいな」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまってお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには餛飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいな」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまってお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰻、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには餛飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつどもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醤油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰻、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えろと下向いてにわかには餛飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合いと、女房のお辰は種吉とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板の間をちよつどもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たいて、あんた、それによろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶、いなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせ